

聖書:使徒の働き21章1～14節

説教:主のみこころがなりますように

はじめに

パウロが地中海周辺を巡って伝道した期間は、三回の伝道旅行を合わせるとおよそ12年間に及んだと言われています。その三回目の伝道旅行を終え船でイスラエルに帰ろうとしています。その途中で会った兄弟たちは皆口をそろえて、エルサレムに行かないようにと強く勧めています。それなのにパウロは人々の忠告を聞かずにエルサレムに行かなければとこだわる。それはどうしてだったのか。そこから私たちはどのようなことを教えられていくのか。ともに見てまいりましょう。

1 エルサレムに行かないように

1) 御霊に示されて

パウロがイスラエルに帰るときどんなルートをとったかは、聖書の後ろにある地図にあります。エーゲ海に面した港に立ち寄りながら進んでいく船はやがて地中海に出て、そこからキプロス島を左に見ながらイスラエルの北にあるツロにやってくる。ところがツロの兄弟たちはパウロにエルサレムに行かないように繰り返し忠告します。イスラエルに帰ればユダヤ人たちが手ぐすね引いてパウロを待っていて、ひどい目にあわせようとしている。そのことを御霊によって知らされていたということです。しかしパウロの決心は揺るぎません。プトレマイオスを経由して次にカイサリアに向かいます。

2) パウロを縛り、渡す

九年前ですがイスラエルに行かせていただいたとき、カイサリアに寄りました。もともとはローマ提督の避暑地として造られたところで、大きな野外劇場はあるし水道設備までそろっていて、当時からかなり大きな町であったようです。パウロがその町の伝道者であったピリポの家で世話になっていると、アガボと呼ばれる預言者がユダヤからやって来てこう言った。11節。「彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言った。『聖霊がこう言われます。『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。』』」

ここには二つのポイントがあります。一つ目。さきほどのツロの兄弟たちもそうでしたが、アガボも聖霊によって知らされたことを語ったということ

です。そして二つ目。アガボはただ口でこうなると言ったのではなく、実際に帯で自分の手と足を縛って実演して見せた。人間は楽観バイアスというものが働いて、口で危ないからよせと言われても「大丈夫だよ」と思いたくなるものです。ところが実際に目に見える形で示されるとそうはいかなくなる。これは本当に危ないということが伝わり、全員がエルサレムには上って行かないようにとパウロに懇願しました。

2 パウロ

1) 反対を押し切って

こういうとき、みなさんがパウロだったらどうするか。普通はこう考えるでしょう。「自分の計画としてはエルサレムに行きたかった。けれどもツロでもカイサリアでも、聖霊が同じように行ってはならないと別々の人を通して同じことを語る。これは神さまが道を閉ざしているのに違いない。行くのをやめよう。」これがまともな判断というものでしょう。ところがパウロはどうしたか。13節。「すると、パウロは答えた。「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」

2) 主イエスの名のためなら

皆の反対を押し切ってそれでもエルサレムに向かうと言うのです。その理由として彼は二つのことを挙げています。一つ目が「主イエスの名のためならば。」主イエスの名とはなにか。以前にも話したことがあります。例えば学校の入学式を考えるとわかりやすい。本来ならば市の教育委員会の委員長が出席しなければならないのに事情が出られないということがよくあります。そんなとき副委員長が来てこんなふうにあいさつする。「本来なら委員長があいさつすべき所ではありますが、事情によりまして本日は出席ができません。副委員長である私〇〇が委員長に代わり、みなさまにひとことご挨拶申し上げます。」本人がいなくても、その人の名前を語ることによって、本人の代わりをする。これが名前がもっている役割です。

パウロは主イエスの名のために、つまり自分は主イエスに代わってエルサレムに行かなければなら

ないと言っているのです。殺されるかもしれないというときに、なぜそこまで言うのか。その答えは9章15、16節にあります。パウロが主に出会って大きな回心をしたばかりのときです。アナニアという人がパウロの所に遭わされていくときに主はこう語った。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

パウロが異邦人の伝道のために遭わされていく最初のときから、あなたはわたしの名のために苦しむことになる。こう言われたのですから逃れることはできません。エルサレムでユダヤ人たちが陰謀を巡らして待ち構えていることがわかっている、行かなければなりません。

3) 死ぬことも覚悟している

こんど捕まったら投獄やむちでは済まない。ユダヤ人たちが自分を殺そうとするだろう。そのことはひしひしと感じていました。そのことをはっきりとパウロは言う。「死ぬことも覚悟しています。」私もこんなふうに言えたら格好いいだろうとは思いますが、でも思うのです。仮に言えたとしても、あのペテロのようにいざとなるとイエスを知らないと言ってすたこら逃げ出すだろう。そんな気がするのです。もちろんパウロは逃げません。むしろ、「あなたがたは一体何をしていますのですか」と、人々を叱りつけるようにしてエルサレムをめざそうとして揺るぎません。そこでみなは、「主のみこころがなりますように」と言って、黙り込んでしまいます。パウロはどうして主の名のためという理由でエルサレムで苦しむ覚悟ができたのでしょうか。

3 イエス

1) みこころがなりますように（ルカ22章42節）

そこでまず「主のみこころ」とはなんだろうかというところから考えます。聖書には、人間の計画や思いではなく、主のご計画だけがあると書いています。自分たちは決して間違っているとは思いません。人間的にも、パウロにエルサレムに行つて欲しくない。でもパウロも主イエスの名のためにと言って譲らない。その決心が揺るがないことがわかると、最後は手放して主にお委ねする信仰に導かれて行きます。

主イエスもこれとおなじことを言われました。ルカの福音書22章42節です。これから逮捕され裁

判にかけられ十字架に追いやられるということが目の前に迫ってきたとき、イエスはゲッセマネの園で汗が血のしずくのように流れるようにして祈っていたとき、こう言われたのです。「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」

2) 十字架の死に向かう

考えてみれば不思議な祈りです。イエス・キリストは十字架に向かうために人となられて私たちのところに来られました。およそ三十歳になられて宣教のわざをはじめられたときから、十字架に向かうアクセルを全開にし、逃げ道を塞ぐようにさえして、十字架に到る道を真っ直ぐに歩まれました。それなのに十字架が目前に迫ってくると、「父よ。みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください」と祈るのです。なぜでしょう。イエスは何かを恐れています。問題は何を恐れていたかです。腕に釘で刺されて十字架につるされるのは痛いだろう、それで恐かったのか。死ぬことが恐かったのか。もちろんそれもいくらかはあったのかもしれませんが。でも父である神と子であるイエスは愛によって強く結ばれていたことを思い起こしてください。もしさばきによってこれが断ち切られるのだとしたらどうでしょうか。イエスにとってこれほど恐いことはなかったのではないですか。

これを聞いて、なんだそんなことかと思った方もいたかもしれません。みなさんの中には父親母親の愛情をたっぷり受けて育ったという方もおられるでしょう。でもどんな親でも欠けが多く完全な愛はありません。それでもイエスに出会って罪から救われ、そこではじめて神の愛とはどのようなものであるのか教えられ、神が私を愛しておられるということを信じられるいようになり、深い平安をいただきました。ところがいま仮に、神はもうあなたを愛していない。あなたを知らないと言ったと想像してみましょう。人生の土台がひっくりかえる、まったく希望がなくなる、暗闇に放り出されて生きる意味を失ってしまう。これほど恐ろしいことはない。「さばかれる」とはそういうことなのです。イエスがなぜこのように祈らなければならなかったのか、少しはおわかりでしょうか。

それでもイエスは最後は「みこころがなりますように」と祈り、自分の思いを手放し十字架に向かいます。父なる神にさばかれる恐ろしさを目の前にしながら、それ以上に神は私たちを愛し救うことを優先されました。「しかし、わたしの願いでは

なく、みこころがなりますように。」この祈りにこそ、神の愛が示されています。

3) 神の愛を知る歩み

ではパウロはどうか。主イエスの名のために、なぜあえて苦しみの道を選ぶのか。イエスの愛にとらえられている私たちは、言ってみればパウロと同じようにイエスの代理人として歩んでいます。パウロのようなケースに遭遇することはまずないでしょう。しかし、いろいろな意味であるとき重大な決断を迫られるときが来るかもしれません。主の御名のために苦しむことになるかもしれない。たとえそのような道であっても、主のみこころならばと信じて選択するのでしょうか。どちらがよいとは私は言えません。でももし、苦しみの道を選ぶとしても、その道は一人ではないことははっきりわかっています。私の友となり、私の歩むべき道を先に進んでくださっているイエスが一緒におられます。人の目にはつらい道に見えても、そこで私たちは知るようになるでしょう。主イエスがどれほど私を愛して下さっていたのか。私を救うためにどれほどの苦しみを味わって下さったのか。楽な道を歩んでいたならまったくわからなかったでしょう。でもいま苦しみの道を通して初めて、神の愛の深さといつくしみの豊かさがよくわかる。パウロはその愛をよく知っていました。だから決心は揺るがなかった。

私たちも、この愛を注いでくださる主とともにまたこの一週間を歩んでまいります。